

国語

問題冊子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

1 この冊子の本文は10ページまである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあった場合は申し出ること。

2 解答は、問題ごとに、答案用紙(別紙)の所定の欄に記入すること。

3 答案用紙は、その一、その二、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験番号	氏名
1	
2	
3	
4	
5	
	大塚 茶織

- 4 答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。
- 5 この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

ラッシュアワーのとき、見知らぬ誰かが駅の階段ですっ転んだとしよう。あなたはこの光景を目撃した。このとき、ひと知れずあなたは笑みをこぼした。その笑いの理由をトマス・ホップズは「他人のなかになにか不恰好なものがあるのを知り、それとの比較でとつぜん自己^(さん)を称讃する」ところに見てている。「とつぜんの得意」とは、すっ転んだ他人と自分を比較して、「そんな惨めな失策を私だったらしないのに」と目撃した私たちは想像するだろうし、その際には優越感が生じるだろうというわけである。自分と他人との比較がもたらす笑いの条件に注目するのが優越の理論というものである。あなたは「不恰好なもの」を露呈した他人を笑うこと、「笑う者」となり、この笑いによつて、他人を「笑われる者」にするのである。

ホップズの考察で興味深いのは、この「とつぜんの得意」が「笑う者」の主観的で架空の比較に基づいている点である。これまでの人生で、人前ですっ転んだことのないひとはほとんどいないだろう。少なくとも、これに類似した「不恰好なもの」を露呈してしまう経験は、誰しもどこかで行つてきたに違いない。完璧で、決して失敗しない人間などいないのだ。それにもかかわらず、私たちは自分たちのこれまでの愚かさを忘れて「そんな惨めな失策を私ったらしない」と思い込み、笑う。それを支えているのは、笑う者の都合の良い、勝手な比較がもたらすフィクションに過ぎない。

このような「笑う者」に、ホップズはとても手厳しい。「他人の欠陥についておおいに笑うことは、小心のしるしである」。なぜなら、偉大な精神の持ち主であれば、他人が「不恰好なもの」をあらわにした際に、笑う前に救いの手を差しのべようとするだろうし、他人と自分を比較するならば、自分より優れたひとつと比較して、自分に足りないものを反省し、よりケンキヨ^(a)であろうとするはずだからである。ホップズは「自分のなかに最少の能力しかないことを意識している人びと」だからこそ笑うのだ、と言う。私たちは「笑われる者」を愚かな存在とみなすけれども、実のところ真に愚かなのには誰かを「愚かな者」と思い込み笑っている側なのではないか、と言うのである。

古代ギリシアのプラトンやアリストテレスの笑い論も、この優越の理論と呼びうる傾向を示していたが、ホップズのこの考

えが人口に膾炙し、賛同という形であれ、その後の笑いの研究を大いに支配したのである。『笑いと嘲り ユーモアのダークサイド』でマイケル・ビリッジは、ホップズの論を受けて「だから笑いに満ちた社会は楽しいところではない。そこは人生」という競争で、それぞれが互いを負かそうとしている嘲笑の場である」と言い放った。笑いの研究はまず、この「笑う者」をネガティヴに捉える「笑ってはいけない」という地点から出発したのである。

さて、この「笑ってはいけない」社会を考えるのに、ポリティカル・コレクトネス（PC）をめぐる議論に目を向けてみよう。しばらく前から世の中にシントウ^(b)してきているこれは、政治的公正を意味する。劣位に置かれていると思われる人々が自分は優位にあると思い込んでいる者から被つてきた差別や偏見を是正し、政治的また社会的に公正で中立な姿勢を求める。

この意識は欧米社会で花開いた。白人男性中心主義の社会に疑問を持ち、ジェンダーや人種、障害の有無などの観点から公正さを重視する立場（例えば「ポリスマン」ではなく「ポリスオフィサー」と呼ぶようになると）だが、広義には、外見に対しても世間が抱く価値観に対して、その不公正さを問題視する態度もこれに含まれる。日本においては、今日でもなお女芸人たちが自分の容姿を不々にし、それで笑いをとっている。これは笑われることで笑わせる笑いの一種ということになるのだろうが、こうした笑いが、ポリティカル・コレクトネスの観点から批判を受けるという出来事は、近年、日本でも度々起こっている。

私たちも 優越の笑いを笑ってはいけないのだろうか、笑つても良いのだろうか。

アメリカのアニメーション番組『サウスパーク』は、社会の中に過度なPCの傾向が広がることに對してケイショウ^(c)を鳴らすシリーズを、二〇一五年に放送したことで話題となつた。このシリーズの第一回、おなじみの子供たちが過ごす小学校に、ある異変が起きた。校長が急遽交代することになつたのである。新しく赴任したのはサングラスをかけたマッチョな白人男性だつた。彼の名は「P.C.校長」。学校でマイノリティが差別や偏見に遭つていると知れば、すかさず行動に移し、犯人を徹底的に懲らしめる。暴力も辞さない。マジョリティの側に立つ白人男性がマイノリティを擁護するというねじれがコミカルで、正しいことを貫くためなら腕力も行使するという皮肉な態度は、ポリティカル・コレクトネスが持つ負の側面をあぶり出そと

する諷刺である。『サウスパーク』の作者たちは、この校長を暴れさせることで、ポリティカル・コレクトネスの問題性を浮き彫りにしていった。

ホップズ同様、笑いを「優越」の観点で分析した哲学者にアンリ・ベルクソンがいる。彼は、「ぎこちなさ」と「柔軟さ」といった独特の概念を用いて議論を展開した。

ものごとに對してリンキオウヘンにまた柔軟に対応できることは、社会が求める私たちのなすべき振る舞いである。ベルクソンはまずそのように主張した上で、そのような優美な振る舞いが失調し、人間が機械の見せるようなぎこちなさをあらわにするとき、ひとは笑う（笑われる）のだと考えた。したがつて、ここで笑いとは「懸念」の表明であり、「矯正」の表現である。また「笑われる者」とは社会の心配の種ということになる。そしてベルクソンの場合「笑う者」とは、ホップズの言う「小心」者ではなく、優れた社交性を有する優れた人物となることになる。

さて、「笑われる者」となるとき、ひとは「出来合いの枠」を嵌められたようになる、とベルクソンが論じていることに注目してみよう。

「出来合いの枠」とは、社会からひとに充てがわれるタイプのことである。『オセロ』『ハムレット』など悲劇ではしばしば主人公の名前がそのままタイトルに付けられる。これとは対照的に、喜劇では主人公の名前よりも彼や彼女を侮蔑する名詞（『守銭奴』『才女気取り』など）がタイトルになることが多い。このことにベルクソンは注意を促し、滑稽な場面では、ひとは唯一無二の当人そのものではなく、その状況にふさわしいタイプで呼ばれるのだとした。「出来合いの枠」とは、社会が想定する不恰好な状態を指すレッテルである。ひとが笑われるような状態をあらわにしたとき、そうしたレッテルが外側からそのひとの状態に充てがわれる、というのである。なるほど私たちは、誰かが転んだとき、そのひとを笑っているというより、そのひとの失策が出現させた「間抜け」なるものを笑っているのかもしれない。「出来合いの枠」は、私たちを複雑にはしない。すなわちそれは、私たちが当該の人物の特殊性・固有性に意識を向けることをやめさせ、代わりにそのひとの「間抜け」さに目を向けさせるのであり、そういう仕方で私たちを単純にする。「間抜け」と他人を笑う笑いというものは、そうした「枠」越しに他人を見るよ

う私たちを促しているのである。

先にも触れたように、このようなベルクソン流の優越の理論においては、「笑う者」を小心者と非難するホップズとは異なり、「笑う者」は社会において柔軟さを發揮できる優れた人物である。彼は、笑われる者の愚かさを危惧して笑う。ベルクソンは「優美」と「滑稽」の対比をこの議論の中軸に据えながら、社会というものの運動を阻害する対象が、滑稽なのだとした。「性格と精神のこわばり、そしてまた身体のこわばりも、社会にとつてはすべて心配の種となる。なぜなら、こうしたこわばりは活力が眠りこむしるし、あるいは活力が分離し孤立して社会の描く軌道から外れてゆくしるし、つまり中心はずれのしるしかもしれないからだ」（一部筆者改訳）。

なるほど「吝嗇」や「賭博狂」のような一般的なタイプを挙げるとき、ベルクソンはあくまでも笑われる当人の、非難されても仕方がないような行為を笑いの対象にしている。けれども、それに限らず、過度の肥満、どもり、背中にこぶのある男などにも目を向け、こうしたひとの身体的特徴にも「生きているものの上に貼りつけられた機械的なもの」を見るベルクソンの眼差しは、現在ではポリティカル・コレクトネスの立場から批判を受けるものに違いない。そればかりか、人種に関して、身体的あるいは精神的障害に触れる事柄に関して、またはひとを醜態で判断することに關しても、そこで生じる「不恰好さ」に言及しながら、彼はそのおかしさを疑わない。多様性を尊重する現在の世界の動向とは逆向きのベクトルを彼の笑い論は有しているのである。

こう考えてみると、ポリティカル・コレクトネスの立場が優越の笑いに批判の矛先を向けることにも、納得がゆく。しかし、さらに丁寧に問題の本質を掘り下げてみよう。そもそも優越の笑いが発生した場で、私たちが笑われる側に立ちたくないと思うのはなぜだろうか。それは一つに、自分を「不恰好なもの」という「出来合いの枠」で決めつけられることが恥ずかしく、惨めで、情けないことと思うからだろう。駄で思わずすっ転んだ自分が笑われたくないのは、自分がその行為を通して「間抜け」と思われたくないからである。そこでは、

「不恰好なもの」が「出来合いの枠」である

という認識が前提になつてゐる。しかし、ベルクソンは、これまでの議論をひっくり返す、こんなことも言つてゐるのである。「ある意味で、性格というものはすべてみな滑稽であると言えよう。ただし、ここで性格というものを、人間において出来合いのもの、一度組み立てられると自動的に作用する機械仕掛けのようにわたしたちの内部にあるものと解してのことである。お望みなら、それは自分で自分を反復しているところのものであると言つてもよいだらう。したがつて、それはまた他人が反復できるところの自分であると言つてもよい」。

なるほど私たちは、ついこう考えがちである。

「出来合いの枠」＝「不恰好なもの」＝そう名指しされたら恥ずかしいもの

しかし、別の仕方で考へることもできるのではないか。それ自体としては社会において高い評価を与えてゐると思われるような性格（ここでは「性格」とはタイプとほぼ同義で用いられていると考えられる）、例えば「美女」「イケメン」「天才」も、一種の「出来合いの枠」ではないのか。「出来合いの枠」とは、誰かの機械的な振る舞いに外側から押し当てるものである。もしある積極的な評価を一般には受けそうな振る舞いが、過度な傾向を帯びてしまい、それゆえに機械的なものに映るならば、それはまた滑稽さの対象ともなり得る。いかにも「女子アナウンサー」風のセイソな身なり、取つて付けたようなナチュラルメイク、それ系の専門学校で習得してきたのでは（事実かどうかは別として）と想像してしまった定型のぎこちない笑顔などを見せる女性が目の前に現れたら、私たちは彼女のことを「女子アナかよ」と笑うだらう。社会的にネガティヴな評価を受けるキャラクターのみならず、社会的にはもっぱら評判の良いイメージであつても、嘲笑の対象に転じることは大いにある。それらは、どちらも「出来合いの枠」のなせる技であり、「不器量」と「美女」も、そうした笑いの対象であり得るという点では同類なのであ

る。すなわち、

「出来合いの枠」が「不恰好なもの」である

何がおかしいって、誰かの行動や併たたずまいが思いがけず「出来合いの枠」にスポーツと嵌まってしまうことが、おかしいのである。ベルクソンの笑い論にはこうした面もある。その面では、そこに現れた「出来合いの枠」が社会的に優れたものとみなされているのか劣ったものとみなされているのかは、たいした問題ではないのである。

(木村覚『笑いの哲学』による。一部修正した)

注

○トマス・霍ップズ——Thomas Hobbes (一五八八～一六七九)。イギリスの哲学者。

○マイケル・ビリッジ——Michael Bilig (一九四七-)。イギリスの社会心理学者。

○アンリ・ベルクソン——Henri-Louis Bergson (一八五九～一九四一)。フランスの哲学者。

問(一) 傍線(1)「ホップズはとても手厳しい」とあるが、筆者がホップズの考えを「手厳しい」と述べている理由を説明せよ。

問(二) 傍線(2)「負の側面」とは何を指しているのか説明せよ。

問(三) 傍線(3)「優れた社交性を有する優れた人物」と言えるのはなぜか説明せよ。

問(四) 傍線(4)「枠」越しに他人を見る」とはどうなことだと筆者は述べているか説明せよ。

問(五) 傍線(5)「出来合いの枠」にスポーツと嵌まってしまうことが、おかしいのはなぜか説明せよ。

問(六) 波線「私たちは、優越の笑いを笑つてはいけないのでだろうか、笑つても良いのだろうか」とあるが、あなたはこの問題をどう考えるか。三〇〇字程度で述べよ。

問(七) 本文中の傍線(a)～(e)の片仮名を漢字に直せ。

次の文章は、旅に出ている知人に宛てた書簡である。これを読んで、問一～五に答えよ。

玉鉢の道もいつしか遠くなりて、いづこのいかなる海山を、いくらばかりか越え渡り給ひつらむ。卯の花の憂きものと聞く旅の空に、今は夏草の露さ(a)へしげくなりぬらんとおぼゆるに、鳴くや五月の長雨も暇なき折にこそあれ。また思ふには、呉竹の世の中のまじらひに月日を経る人は、身は安げに見えて下に苦しき数こそ増さりぬべけれ。いと荒榜の衣、藁の沓して、山賤めかしきものから、言の葉優るべき山のけはひ、絵によく似たる浦のたたずまひなど、思ふまにまに名高き所をも見つつ過ぎ給はんぞ、あやしき古屋(b)に、琴の音よきたと(c)へのごとく、やつれに似ぬ心の楽しみは、世にうらやましうも、はた思ひやり侍る。つれづれなるままにはつどひて、あるはなげき、あるはうらやみ、道の空のあらんさまを知らぬものの言ひ思ふにはいかにはなひ給ふらん、言ひしろひてはをかしうさへなる日も侍り。ただ玉鉢の行手に幣(d)よくまつりて、つつみなく詣で給はん大(e)神の御前(f)ごとには、そこのもここのもかぞいろはのながきよはひをねぎごとにはしたうびてよ。今はこよなう月日のあまたになりて、誰も誰も指もそこなひぬべうはべれば、こなたざまに向かひ給ひてよ。「山の奥こそ住みよけれ」と言ひおきたうびつるをうしろめたうも、又は葛の葉の裏風吹き立ちなんあたりもなくやはとおぼし帰りねかし。(g)さるべき風の便(h)を待ち得たれば、かくばかりも聞ゆるになん。

(4)いづかたの草の枕かとふならん言(i)づてやりし山ほととぎす

(『ゆきかひ』による)

注

○呉竹の——「世」にかかる枕詞。

○荒桟——織目の粗い粗末な布。

○言の葉優るべき——よい歌が生まれそうな。

○はなひ給ふ——くしゃみをなさる。

○つつみなく——無事に。

○かぞいろは——父母。

○指もそこなひ——月日を指折り数えるので指も痛め、の意。

問(一) 傍線(1)を、適切に言葉を補いながら現代語訳せよ。

問(二) 傍線(2)はどういうことを言つているのか説明せよ。

問(三) 傍線(3)を現代語訳せよ。

問(四) 最後の和歌(4)は、書簡の内容をふまえると、ホトトギスに託して贈り主のどういう心情を述べたものと考えられる

か、説明せよ。

問(五) 二重傍線(a)～(c)の助詞の種類と意味を記せ。

(例) 人知らで——接続助詞・打消

次の文章を読んで問(一)～(五)に答えよ。

天ニ有レ過チ乎。有リ之。陵歴鬪饉、是也。地ニ有レ過チ乎。有リ之。崩弛竭塞、
 是也。天地拳有ナ過チ卒不レ累覆且載者何。善復レ常也。人介ニ
 乎天地之間、則固不レ能ハ無過。卒不レ害聖且賢者何。亦善復レ常
 也。予之朋有ナ過而能悔、悔而能改。人則曰、「是向之従事云
 爾。今従レ事、与ニ向之従レ事弗レ類。非ガルノノニ
 豈知言哉。天播ハ五行於万靈、人固備而有レ之。有シテ
 而不行則廢。一日咎前之非、沛然思而行レ之。是失ヒテ
 復タゲル也。顧曰、非其性ニ是率キテ天下而戕レ性也。

(王安石「原過」による)

注

○陵歴闕蝕——日食など天象の異常。 ○崩弛竭塞——山地の崩落など地上の異常。

○覆且載——天地は万物を覆い載せるものと考えられていた。 ○五行——万物を構成する五つの元素。

○万靈——すべての生物。 ○咎——後悔する。 ○沛然——勢いあるさま。力強いさま。

○顧——逆に。かえつて。

問(一) 傍線(1)「復常」とはどのようなことか、説明せよ。

問(二) 傍線(2)「是向之從事云爾。今從事、与向之從事弗類。非其性也。飾表以疑世也」を訳せ。

問(三) 傍線(3)「知言」とはどのような意味か、本文をふまえて説明せよ。

問(四) 傍線(4)「非」と最も類似する意味を表す漢字一字を文中から抜き出して記せ。

問(五) 筆者は人間の過失についてどのように考えているか、本文全体をふまえて説明せよ。